



【まじん 2024
たんてい 12/4】
ADULT ONLY

♥ Lunch timeを御一緒に ♥



ネウロ×ヤコ本です。(ちょっぴり吾代×ヤコも入ってますが)
3月に大阪シティで出したコピー本も収録しました。
がーっとイキオイで描いたモノですが
少しでも楽しんで頂けたら幸いです。

本誌ではヤコちゃんとネウロがどんどんお互い気になる
存在になっていってるっぽい展開に毎回ときめいています。
(ちゃんとここぞという時には助けてくれるっていいなあ)
この二人だけでなく、とにかく気になるキャラが
山盛りでたまりません。
アイちゃんとか笹塚サンとか
吾代サンとか吾代サンとか吾代サンとか!!!

ネウロ×ヤコもまだまだ描きたいけれど
サイ×アイや吾代×ヤコも描いてみたいです。



2006.08.12発行
酔花ころん(すいか時計)
メール:suikadokei@yahoo.co.jp
URL(PC用):<http://www.kcc.zaq.ne.jp/suika/>

この本の禁止事項
18才未満の方の購入&閲覧
無断転載 及び 複製(ネット公開、CDROMなども含む)
オークションへの出品

どうぞご協力のほど、宜しくお願い致します。



おつはよー♥
ネーウロー!!

学校の近くで
お祭りやってて
さー

ひろもー
かつもー
もー
またかが
ひつぱい

うるさいぞ ヤコ
喰うかしやべるか
どちらかにしろ

かろ
かろ

...
テマッ

ハッ!!





どれ
少しばかり
試してみるのも
面白いかな

え?
え?

ええええ?
アッ!



え?



!? ぼろぼろ!

ぼろぼろ



ネウロ?
た、試すって
何を?

貴様に食欲以外の
持ち合わせが
あるかをな



まあ それほど
気にするほどの
事でもあるまい?

気に入らない女の子
なんかいるわけ
ないでしょ
ばかーっっ!!

ザッポ



とりあえず
まずは性欲でも

そんなモン
興味もたつない
でよーっっっ!!



ならば報酬に
この間喰いそびれた
満漢全席とやらを
喰わせてやろうか？

えっ？
ま、満漢全席!?

ダメダメダメッ!
そんなモンで
大事な身体を
いーよーにされて
たまるもんですかっ

では



そんな事は口実で
貴様が好きだから
抱いてみたいと
言ったらどうする？

ドキ
ドキ

は？



ななな
何の冗談…

だって
それにそんな事
急に言われても
困る…し

ドキ
ドキ



困る？
それでは
答えになっていない
ではないか？

や…っ
ちよ…
待ってネウロ

ドキ
ドキ





惚れていると
交尾をするために
濡れて受け入れ
準備をしないと
聞いた事がある

なんだ 貴様
我が輩に惚れて
いたのなら
そう言えばよかろう

どつから
そんなつまんない事
聞いたのよ!

なるほど
好きだと言った
途端に大人しく
なったわけだ

ちがうってば
ばっかっ!

まず一度
イかせてやるもの
らしいな

安心してすぐに
交尾したりはせん
どうだ、ヤコ
我が輩は
やさしいだろう?

はっ!?

ぐわん



貴様はココが
いいようだな
…指先でわかるぞ

我が輩に
イカされる事を
ありがたく思え

いっしょ

ヤコ

いっしょ

いっしょ

いっしょ

あいつ





これなら
挿入できるだろう
ヤコ、足を開け



ふむ
十分に濡れた
ようだな



我が輩を
受け入れる

や...
ネウロ

ぶわわ

ホントに
する...の？

ちゅわ
あ

あ







なるほど
悪い心地では
ないな

なににより



貴様のそんな
表情を
見られるのは

面白い…!!











うわー
うわー
ネウロとHしちやったよ

でもでも好きって言われたし

恋...人? あいつ魔人だよ???

これからどんな力オして話せばいいのよ...でもでも



ネ
ネウロ?



好意を見せれば少しは人並みに情愛などが湧くものかと思っただが鈍感な奴は何も変わらん

なによなによ
なによーっ

あんただって乙女ゴコロに鈍感なくせにーっ!!



おナカ
空いたね...

貴様は
開口一番
ソレか





我が輩とて
鬼ではない
多少の
慈悲の心も
持ち合わせている

奴隷に施しを
くれる事も
あるぞ？



う…うん♥
じゃ…
じゃあ！
満漢全席が
いい！！

バカ言え
貴様、一度
断つただろうが

あれはだつて
あんな風に
言われたら
誰だつて断るつて！

ねえ
ネウロ
満漢全席

うるさい
黙つてろ
一番安い出前でも
取つてやる

ええ〜！！



どうした
喰わんのか？
せつかく奮発
してやったのに

うん…
こうなる
かなとは思つて
いたんだけど

それでもついで
期待しちゃつた
自分に腹が立つよーな
情けなくなるよーな…

「さて、今日はよろしくね！ あかねちゃん」
長くなつた髪をしやらりと撫でてから、事務所を後にする。

吾代に麻雀に誘われているのである。
これが夕飯おごりなどがかかっているのだから、まず負けない自信はあるのだけれど
賭けるのがお小遣いとなると……どうもあやしい。
結果的にいっしょな事だとは思いつけれど、テンションがどうも上がらないのだ。

それでも稼ぎはネウロに取られている以上、わずかなお小遣いは死守したい。
その上で吾代さんからお小遣いをすこーし頂くのは悪くない。と含み笑いが漏れた。

そこで、あかねちゃんに登場を願った。
案の定、やさしいあかねちゃんは快く承知してくれた。
あかねちゃんの頭の回転の速さをもってすれば、麻雀ぐらいはたやすく勝てる筈だ。

吾代のメモの場所にあつたのは安っぽい、昭和の時代に建てられたのだろうと
思える文化館だった。
二階の奥の木のドアをノックするとすぐに吾代が顔を覗かせた。
大層ほどの部屋に簡易の台所とトイレ。吾代さんが言っていた友人が二人。
「お、その子？ 入んなよ」
部屋のうちこちにはビールの空き缶が転がっている。
どうやら手土産にキーキでなくタコわさを選んだのは正解だったようだ。
むっとした煙草の匂いがあたりを充滿している。

「けほけほとむせながらすでに勝負の最中だったちやぶ台の
一辺の床に腰をおろす。
「コレおわつたら次の局からな」
：吾代さんはじめ、煙草を消してくる気はないらしい。
なにせ私の髪が長くなっていることにも気付かないのか
何も言わないような男なのだ。
(もちろんウィッグだとさういふつもりではあつたけれど)
それにしてもまったく気にも止められないというのは
それなりに乙女ゴコロも傷つく……」

ちらりと目を向けると二人の男はいかにも吾代さんの友人達
といった風情だった。
何を食べたらさういう目つきの人間ができるのか。
髪の色が茶色と黒で少し長めなぐらいで吾代さんと年は
そう変わらない……と思う。
オトナの男の人つてみんな同じにみえて
年齢が分からないんだよね。と心のなかで呟いた。
そんな事を考えながら、面子に加わり、数時間後には
ほくほくと帰りに何を買い食いしようかと考えながら
家路をたどる………。答だった。

「さて……次はどうする？」
吾代さんの声にブラのホックにふるえながら指をかける。
惨敗だった。
あかねちゃんやんの指示を信じて牌を動かしていたところ、
貯まるわ貯まるわ負債の山。
これ以上はヤバイと服を脱ぐのを賭けにするかわりに
負債を帳消しにする作戦に出たのだが……この有様だ。

「あの……さ、吾代さん？ 来週には用意出来るから……その、
今日はここまでにしてくれないかな……なんて……」
正直、最初から負ける事は考えてもいなかったのだ。
小銭ぐらいいしか持ち合わせていないのだ。
いや、昨日、いくばくかはあつたのだが、それでも
ラーメン屋を20軒ほどめぐったならなくなつてしまった
程度なので、所詮、今の自分が抱えている負債には
はるかに及ばない。

「……所長おサマよお。俺の元の職業、言ってみな」
「……」
「取り立て屋」

こうなつたら無理かもしれないけど泣き落とし……でも
してみるかと思つた時、するすると髪がブラのホックに
かかり、止める間もなく滑り落ちた。
更にショーツにまで髪が伸びる。
「ぎゃああああ あああああかねちゃん……」
あわてて胸を隠してショーツが引き下ろされぬように
手でおさえる。

「へえ……話はえーじやねーの。いいねえ」
吾代がいやらしい笑みを浮かべながら肩に手をかけ、
押し倒した。
「いやいやいやいやいや、これは私の意志じやない
から……髪が……ねっ……」
「まーまー、ここにきて焦らすのはナシだろー？お嬢ちゃん」
吾代さんも他の二人も髪がよるよるよると動いていることに
まるで気を止めていないようだ。
酒が入っている&鈍感のコンボとはいえ、
できればここは気付いてほしかった。

手で押さえていたぐらいではなんの抵抗にもならず、
吾代さんの手がショーツをはぎ取る。
必死で足を閉じ、両手で抱きかかえるように胸を死守した。
「あ、胸かくすんだ？……なら下はOKだよな」
言うがはやくはやく吾代の指が股間にねじこまれる。
足の上に吾代さんの腰があるので、
膝を立てる事もできない。

他の二人がにやにやと
煙草をふかしながらその様を眺めている。

指はじりじりと秘裂に近づき、包皮に包まれた突起に達した。
途端に身体に電流が走つたような衝撃をうける。
「や……っ やだああつっ」
反射的に片手で吾代を押しつけようとしたところを捕まれ、
ねじり上げられる。
痛さに力が抜けると、待つてましたとばかりに両手を絡め取られ、
男の一人が投げてよこしたタオルを使い、あっさり手首を
頭の上で縫い止められる。
男達の目の前に胸が晒された。

「ガリガリの色気のないガキかと思つていたが、
けっこうイイ身体じゃねえか」
片手で手を押さえつけながら、
ひゅうと口笛を吹いて吾代が見下ろす。

ふるふる震える誰にも見せた事のない乳房は、なかなかのボリュームだった。あかねちゃんとの合体の時にだけ、UPする事に気付いたのは最近で、実はビツカにほくそ笑んでいたのだったのだ。

聞く気など初めからない吾代の唇が膨らみを堪能しはじめ。先端の桃色の突起はようやくやく女らしい形に成り代わろうとする序盤の姿である。くすぐりたい感触とぞくぞくと襲い来る寒気に似た感触に朦朧とする。

自分でこっそりといじったりはしてはいたが、まるで違う感触にとまどう。違ふとは感じていたが、これほどまでとは。

吾代の煙草臭い唇が乳房にかかっていた髪にかすかに触れた瞬間、先ほど以上の快楽……と認めざるを得ない感触に総毛立つ。

そもそも、あかねちゃんの様子がおかしくなつたのはこの部屋に入ってきたからだった。勝てる筈の勝負に勝てず、脱衣麻雀もあかねちゃんのアイディアによるものだった。

煙草……って髪によくないと聞いた事がある。しかもあかねちゃんはかなり繊細なタイプだ。もしかしたらもしかしたらと色々な予感に囚われた。

その予感を肯定するように、髪が乳房を揉みし抱き、吾代にその先端を觸るように煽るかのごとく突き出した。あかねの煙草の煙による暴走なのは間違いない。

「あかねちゃん。待って？ ひゃああああ？」 やめさせようとしたが、吾代はそのまま突起を口に含んだ。

痺れるようなふわりと浮き上がるような感覚が襲ってくる。舌さきで吾代が突起をむさぼる。

「や……っ。吾代さんっ。やだあああっ！！」

拒否の言葉を叫ぶが、その声にはすでに法悦が混じっている。髪がしゅるりと伸びて他の男のそり立つた剛直に絡みつく。やわらかなウェーブが締め付け、なぞり、先端の露をなでつけるようにくすぐる。

突然、弥子の秘裂にずぶりと太いものが抵抗なく入り込んだ。そのまま荒々しく吾代の剛直が上下に出し入れされる。

「ああっー！！ いっ……いやっ」

すでに潤っていた秘裂は待ちかねたようにひくひくとあななき、その振動に合わせて蜜がとめどなく溢れ、したたり落ちる。男の手が乳房を包み、硬い指が、強い力で乳房を揉みしだく。

あちこちから与えられる快楽に弥子は朦朧としながらも秘裂は男のものを根元までくわえ込んで離さない。

吾代と向かい合い、楔で繋がったまま抱き上げられる。
勢いさばりにすずんと深く入り込む。

「あ……あああうっつんっんっんっん!!!」
弥子の嬌声が響く。
「尻をかかえあげた吾代が目配せすると、二人の男がジーンズから
剛直を引きずり出し、弥子の尻の穴にあてがった。」

排泄器官をまさぐられ、瞬間、我に返ってたじろぐ弥子を気遣う事なく、
吾代との結合部から滴り落ちる雫で十分に潤っているそこへ
腰をゆつくりと進めた。
「か……はあっ」息が止まる。

後ろの穴の進入によって吾代の物がより、秘裂の中をこすり上げる。
吾代が何度も何度も腰を打ち付けるたびに弥子も我慢できなくなったらしい。
腰を動かすはじめる。
弥子が繋がっている場所がきゅんと締め付けられ、
吾代が尻の肉を掴んでその快楽を逃すまいと欲張る。

「やめ……てえー!!!」

「ああっやだああっ……イッチャう……イッチャう!!
突き上げる衝撃にふいに達しそうになる。
必死で耐える。いや、耐える必要はないのだと分かっている。
三人もの男にイクところを見られるのは恥ずかしい。
その様が見ますます男達を興奮させていることに弥子は気が付いていなかった。
部屋の隅に置かれた鏡には男達に勝られている自分の姿が映っている。」

じゅぶじゅぶと水音を立てる秘裂は流血し、抜き差しされるたびに
太い剛直が秘肉をめぐれ上からせる。
「イッチャう……イッチャう……っつもの、許して……!!!」
乳房を味わわれながら、喘ぐように言った。
吾代の背筋をぞくぞくと解放感が走り、弥子の中へ放出した。
「あああああうっ……あん……あ……」
喉からため息が漏れる。

がが身体なまだ快楽を欲しがっている。
後ろの男はまだ東てはなない。
残っていた男が吾代の引き抜いた秘裂に進入する。

「どっやう、まだまだ楽しめそうだ。
弥子は舌なめずりをした。」

夕暮れがせまる部屋の中で
弥子は今だに余韻が忘れられずにぼんやりと惚けながら、
かたわらにぐったりと寝ころがっている吾代を見下ろす。

「すでに何度も放出を強要され、剛直は力尽き、ひくひくとひくついていく。」
「これ……これが気持ちいいよね……？」
熱に浮かされたような面持ちで、吾代のそれを指でつつく。

「やめ……なんだよ、まだ足りねえのか……？」
吾代の顔がひきつる。

「も……カシベンして……れっ」
抵抗の声もむなしく、しばらく頬張っているうちにそれなりの強度を示し始める。

「これならいいよね……？」
弥子は微笑むと馬乗りになり、もごもごと言い訳をしている吾代の声など
お構いなしに腰を沈めて、じつくりと堪能し始めた……

「次の日、吾代は事務所に姿を現さなかった。
風邪でもひいたのなら見舞いにも行こうと電話をかけたなら
「来るな！ 絶対来るな来るな来るな……！」
と、かなり脅えた様子で絶叫された。」

「あかねちゃん、ダメだつて。つまらないねえ？」
深くタメ息をつきながら、

壁から生えている昨日より潤いとおややかさを増した髪をブラッシングし始めた。

「そうは言っても昨日の心地よさは忘れられるものではない。
ちらりと、ソファでヒマそうに新聞を眺めているネウロを見やり、
うっすらと口元に笑みを浮かべ

「ね……どうかなあ……？」あかねちゃんに目配せする。
こくり、とあかねがうなずいた。



たしかにあの女は
貴様と違って
人間界で言うところの
「美しい」シロモノらしいな

我が輩には骨と肉の
形成の違いなどは
理解出来ぬが



あのふくよかな胸
の触り心地などは
貴様とは
比べ物にならない
だろうな

ふむ
面白いかも

ちよ…っ

人間とは
不思議なモノだ

言葉通り
だが？

貴様に
したように

試す…って
何よ？



それを聞くのは
我が輩の方か？
だと思ふが？



な…っ

アヤ・エイジアが
そんなになら
ぬのか？

何だ？
ヤコ

満足した？

ヤコ

■Turning point■



何度も貴様に
したように
こすり上げて

腕を
満たす...

この娘を抱いたのは
人間の性欲への
ほんの好奇心だったが

しかし
あの声を出す唇とも
なれば
喉うしか使いだの
ない貴様とは
やはり...
やめてよ
ネウロ

乳首を
こねくり回して
今、我が輩が
進入っている
所にな

受け入れる
ようにしてやる

動かな
いで...
やあ...
ア...

あの女と貴様は
どれぐらい
抱き心地が違うの
だろうな?
違わないわよ
そんなもの

そうか?

それぞれ違うと

吾代は言つて

いたが?

吾代さんの
言う事なんて
アテにしないでよ!

なぜ
数回
身体を重ねただけで
こうも
変わるのだろうか

変わらない
つてば...!!

ネウロの
ばかつ



すぐに身体が
反応する



…ほろ？
いやがっ
てるのか？
これで？

求める
食欲に

何が
「ちがう」？

「あま
り」

欲しいの
だろ？



あまりにも
謎がない

あついでに
この体は
知り尽くして
いる

あけつひろげ
分り易い



この娘は
単純だ

分かった

分かった
おつとしてほしい
のならしてほしい
言えよかろう？



な…っ？



ネサロの
ばかっ

ちが…っ

あま
り





身体も昏も
それを重ねる
事に意味は
無い

顔の美醜
など興味ない



……アムン

嫌……いッ

……アムン

ネウロ……のばか

あ……ッ

アムン



〜だんなさ

〜だんなさの感情だ

唇を

体を重ねる事に
何の意味がある？



いつも
満たされない

あまりにも
謎がなくて

■ CINE ■

